

穂別町立博物館所蔵の脊椎動物化石について\*

地徳 力\*\*

On some vertebrate fossils, collected by the Hobetsu Museum\*

Tsutomu CHITOKU\*\*

I はじめに

穂別町付近で発見された爬虫類化石については鈴木(1984)が概要を報告している。また、穂別町付近の上部白亜系から産出し、かつ穂別町立博物館が所蔵している脊椎動物化石については鈴木ほか(1982)が報告した。さらに、新生代の哺乳類なども含む、穂別町立博物館所蔵の脊椎動物化石については地徳(1987)が概要を報告している。

これらの標本のうち多くのものは断片的な資料で、高次の分類学的位置も明確にならないものも多いが、いくつかについては詳細が報告されている(平山・鈴木;1985、NAKAYA;1989b、鈴木;1985a, bなど)。また、化石骨を母岩から剖出するには多くの時間を要し、直ちには分類学的位置が明確にならないものも多い。ある程度まとまって産出し、分類学的に重要なものについては逐次報告して行く予定であるが、本報告では、鈴木(1984)以後に発見された資料及びそれ以前のものも含み、分類学的位置が判明してきたものについて、概略を報告する。

II 長頸竜化石について(第1表)

長頸竜化石の多くについては鈴木(1984)が、発見の経緯および産出部位などについて報告している。それ以後に穂別町立博物館に寄贈された資料とそれ以前には未詳であったもののうち、8標本が長頸竜化石であることを確認した。この8標本のうち、5標本(HMG-350, 354, 355, 356, 357)については地徳(1987)が概略を報告している。1標本(HMG-358)については、当時は未詳化石であったが、長頸竜であることが確認された。今回、新たに2標本(HMG-359, 360)を追加して報告する。

1990年3月5日受理

\* 日本地質学会第94年学術大会(大阪市立大学)にて、一部講演

\*\* 穂別町立博物館 北海道勇払郡穂別町字穂別80-6

Hobetsu Museum, Hobetsu-cho, Hokkaido, Japan.

第1表 穂別町立博物館所蔵 長頸竜化石一覧表

HMG-: Hobetsu Museum registration number, category of Geology; 穂別町立博物館自然史系登録資料番号

蝦夷上部: 蝦夷層群上部亜層群、蝦夷中部: 蝦夷層群中部亜層群 (その他の地層名は高橋・和田; 1985に従った)

本表は発見年月日ないしは受入順に並べてある。

1990年3月3日現在

登録番号	受入番号	発見者	発見年月日	産地	産出層準	産出部位	文献
HMG-1		荒木新太郎	1975-06-	字長和、穂別川支流、サヌシユベ川	蝦夷上部	体幹主要部 [cf. 仲谷 (1989b)]	仲谷 (1982 a, b, 1984, 1985, 1989 a, b), 仲谷ほか (1981), 鈴木ほか (1982)
HMG-3		黒崎 満	1976-10-	字稲里、穂別川本流	蝦夷上部	腹肋骨	鈴木 (1984), 鈴木ほか (1982)
HMG-350	81-15	佐藤 博義	不 明	字稲里、白崎沢	蝦夷上部	指骨	地徳 (1987)
HMG-351	82-6	三浦 清	1981-09-	字稲里、シュッタの沢	蝦夷上部	指骨、肋骨	地徳 (1987), 鈴木 (1984)
HMG-4	82-10	長岡 静男	1981-	字安住、幌去川支流	蝦夷上部	肢骨、肋骨、胃石	鈴木 (1984), 鈴木ほか (1982)
HMG-352	82-188-①	穂町化石研	1982-10-31	字稲里	蝦夷上部	肋骨	地徳 (1987), 鈴木 (1984)
HMG-353	82-188-③	穂町化石研	1982-10-31	字稲里	蝦夷上部	扁平骨、胃石	地徳 (1987), 鈴木 (1984)
HMG-354	84-38	国分 博治	1984-05-06	字長和、穂別川本流	蝦夷上部	上腕骨、指骨、胸骨、椎骨、肋骨、歯 (印象)	地徳 (1987)
HMG-355	84-86-①	鴨原 崇之	1982-11-28	字長和、登川越の沢	蝦夷中部	肢骨 (部分)、椎骨、肋骨、胸骨	地徳 (1987)
HMG-356	84-86-②	鴨原 崇之	1984-05-	門別町、チベシナイ沢	蝦夷中部	胸骨?、肋骨	地徳 (1987)
HMG-357	86-61	千代川謙一	1986-07-	小平町、達布	蝦夷中部?	椎骨、肋骨、胸骨	地徳 (1987)
HMG-358	86-197	荒木新太郎	1980-09-04	字長和	蝦夷上部?	椎骨ほか	地徳 (1987)
HMG-360	88-10-④	服部 義幸	1986-10-	小平町	蝦夷上部?	椎骨 (× 2; 関節)	
HMG-359	88-10-②	服部 義幸	1988-05-	苫前町	蝦夷上部?	肢骨 (上腕骨?)	

HMG-350 については、発見年月日が不明、産地は穂別町字稲里、白船沢とされているが地形図上の位置は不明である。

HMG-354 については、三笠市に在住する国分博治氏が1984年5月6日に穂別町字長和の旧長和小学校付近の穂別川で発見し、同年7月15日に穂別町立博物館に寄贈した。

HMG-355,356 は平取町に在住する嶋原崇之氏が発見した長頸竜化石である。HMG-355 は1982年11月28日に穂別町字長和、登川越の沢で採集、1984年5月に門別町チベシナイ沢で採集した長頸竜化石 (HMG-356) とともに1984年11月1日、穂別町立博物館に寄贈した。

1986年7月20日、千歳市に在住する千代川謙一氏 (千歳化石会) から小型の長頸竜化石骨を含む石灰質団球の寄贈を受けた。この石灰質団球は留萌郡小平町を流れる小平蕊川のダム工事現場にある滝見橋下流の崖の直下から転石で発見されたもので、小島・蟹江(1965)によれば、この付近に分布する地層は“中部蝦夷層群\*”の最上部層に相当する”とされている。これについては、後日、発見者の千代川氏と現場付近を再調査したが追加標本は得られなかった。

MATSUMOTO *et al.* (1982) は、この発見現場の4 km程上流の川上地区において発見された小型の長頸竜の産状について報告している。MATSUMOTO *et al.* (1982) が報告した標本は現場の河床を構成する泥岩に包含された石灰質団球からもたらされたもので、この化石の産出層準は蝦夷層群上部 (亜層群) (Coniacian and Santonian) であるとしている。この標本は現在北九州自然史博物館に収蔵されているが、化石骨自体はまだ記載されていない。

HMG-358 は1986年の収蔵庫整理時に再発見された。箱の中のメモによれば、1980年9月4日に穂別町に在住する荒木新太郎氏によって発見、同日寄贈されたとされている。発見場所は穂別町字長和の鉄橋の下である。

HMG-359,360 は札幌市に在住する服部義幸氏が留萌郡小平町周辺で、いずれも転石として採集したものである。HMG-360 は、上述のMATSUMOTO *et al.* (1982) が報告した長頸竜発見現場の約300m上流の小平蕊川本流から発見された。かれらによれば、発見現場付近の地層は蝦夷層群上部 (亜層群) であるが、この化石は転石であるためその時代は確定できない。また、HMG-359 は同氏が、苫前町幌立沢において1988年5月に発見した。この発見現場も蝦夷層群上部 (亜層群) の分布地域であるが、同様に転石であるため、その時代は確定できない。

鈴木(1984)は「長頸竜化石は函淵層群より産出した1例 (小島ほか、1972) を除くと、すべて上部蝦夷層群より得られている」と報告しているが、今回三つの標本が蝦夷層群中部 (亜層群) 分布地域から得られている。現在までのところ、資料の多くは断片的である

---

\*蝦夷層群は慣例的に“下部蝦夷層群”、“中部蝦夷層群”、“上部蝦夷層群”と呼ばれ、この三つの“層群”がおのおの別の層群を構成するかのようにされ、函淵層 (あるいは層群) を含めて“蝦夷累層群 (OKADA 1983)”が提唱されているが、これは日本地質学会地層命名規約 (1952) にいくつかの点で矛盾する。その為、ここでは「蝦夷層群」を一つの地質層序区分単位としてとらえ、“下部—中部—上部の蝦夷層群”は「蝦夷層群、下部—中部—上部の亜層群」とする。また、「函淵層群」と「蝦夷層群」を一括し「○○累層群」と呼ぶことには異論はないが、同じ地名を異なる単位に併用しない為に“蝦夷累層群”は使用しない。

第2表 穂別町立博物館所蔵 カメ化石一覧表

凡例は第1表と同じ

1990年3月3日現在

登録番号	受入番号	発見者	発見年月日	産地	産出層群	産出部位	文献
HMG-6		煤孫 三弘	1977-05-	字平丘、大曲の沢	函淵層群	背甲、椎骨、肢骨	鈴木(1984), 鈴木ほか(1982)
HMG-	81-40L	阿部 利春	1977-10-	字富内、トサノ沢	蝦夷上部	背甲	鈴木(1984), 鈴木ほか(1982)
HMG-5		石崎 正行 荒木新太郎	1980-09-	字稲里、白船沢	函淵層群	背甲、肢骨、腹甲ほか	地徳(1987), 平山・鈴木(1985) 鈴木(1984), 鈴木ほか(1982)
HMG-7		荒木新太郎	1980-09-04	字穂別、茂別、穂別川本流	函淵層群	肋板、椎板、大腸骨、尾椎、仙肋骨、骨片	地徳(1987), 平山・鈴木(1985) 鈴木(1984)
HMG-9	81-45	鈴木 茂	1981-10-04	字富内 パンケルサノ沢	函淵層群	肋板、烏口骨	地徳(1987), 鈴木(1984)
HMG-8	81-47	鈴木 茂	1981-10-06	字平丘 パンケルサノ沢	函淵層群	腹甲、大腸骨、椎骨	地徳(1987), 鈴木(1984)
HMG-361	83-33	鈴木 茂	1983-06-05	字富内 パンケルサノ沢	函淵層群	甲片	地徳(1987)
HMG-342	84-70	鈴木 茂	1984-09-16	字穂別、キウス、穂別川本流	函淵層群	頸骨、縁板骨、肋板骨、肩甲骨、腹甲骨、椎骨、肋板突起、肋骨骨片	地徳(1987)
HMG-362	85-23	荒木新太郎	不明	字穂別、茂別	函淵層群?	肋板骨	地徳(1987)
HMG-	85-40L	笠巻毅彦	1985-08-06	三笠市	蝦夷上部	背甲、腹甲、椎骨ほか	地徳(1987)
HMG-363	85-45	地徳 力	1985-08-21	字平丘 パンケルサノ沢	函淵層群	恥骨、脛骨、腓骨、椎骨、大腸骨、腹甲、縁甲板、座骨、骨片	地徳(1987)
HMG-364	85-67	佐藤 亮一	不明	夕張市、登川	未詳	甲片	地徳(1987)
HMG-365	87-20	地徳 力	1987-09-12	字平丘 パンケルサノ沢	函淵層群	内腹甲骨、肩甲骨、烏口骨、腹甲骨、外腹甲骨	
HMG-366	88-10-③	服部 義幸	1985-10-	小平町	蝦夷上部?	甲板	
HMG-367	88-10-①	服部 義幸	1987-06-07	小平町	蝦夷上部?	甲板	
HMG-368	89-14	地徳 高橋 博志	1989-06-11	字富内 パンケルサノ沢	函淵層群	甲片	
HMG-369	89-25	利光 誠一	1989-09-06	字平丘 パンケルサノ沢	函淵層群	腹甲、背甲、肢骨	

ため、異なる産出層準からの標本の比較は出来ないが、今後多くの資料を収集することによって、比較・検討が可能になると思われる。

### Ⅲ カメ化石について (第2表)

穂別町立博物館に現在収蔵されているカメ化石は17標本である。これらのうち2標本については寄託されたものであるため、登録資料番号は付番されていない。鈴木(1984)は、これらのうち、6標本について報告している。地徳(1987)は、これ以外の6標本について概略を報告した。本報告ではさらに5標本を追加して報告する。

HMG-361 は1983年6月5日、穂別町字富内、パンケルサノ沢\* において、当博物館学芸員(当時)の鈴木茂が発見した。また、翌年9月16日には、穂別町字穂別キウス付近の穂別川で非常に保存がよく、多くの部位を含む標本(HMG-342)も発見している。

1985年には、カメ化石の発見・寄贈が相継いだ。5月11日には荒木新太郎氏から穂別町字穂別、茂別の穂別川本流から採集した化石が寄贈された。これはHMG-362と付番された。

8月6日には、穂別町に在住する笠巻袈裟男氏が三笠市で化石骨を含有する石灰質団球を発見穂別町立博物館に寄託した。

8月21日には、当博物館学芸員の地徳力が穂別町字平丘のパンケルサノ沢を地質調査中に化石骨を含有する石灰質団球を発見した。この石灰質団球から剖出された化石骨(HMG-363)は、これまでに発見されているカメ化石と同一の部位を多く持つが、その大きさは数倍ある。翌々年9月21日、HMG-363の発見現場から10数m上流で同一個体からもたらされたと思われるカメ化石(HMG-365)が発見されている。

1985年には、函館市に在住する佐藤亮一氏が、夕張市登川で発見したHMG-364も寄贈されている。

1988年には、札幌市に在住する服部義幸氏(千歳化石会)が、それまでに収集していた化石のうち脊椎動物化石と思われるものをいくつか当博物館に寄贈した。これらのうち小平町付近で採集したHMG-366,367がカメ化石を含有するものである。

1989年には、当館学芸員の地徳力と学芸補助員の高橋博志がモササウルス化石産地の巡検中に、人物大の石灰質団球の表面に化石骨(HMG-368)が見えているものを発見したが、この石灰質団球の内部には化石骨はなかった。

同年9月には、利光誠一氏(高知大学)が地質調査中に穂別町字平丘のパンケルサノ沢において、化石骨(HMG-369)を含有する長径1mを越える楕円形の石灰質団球を発見した。この石灰質団球には内部まで化石骨があることが確認できたため、数日後、重機を使用し搬出した。この搬出には穂別町在住の河崎元也氏(採石業)の協力を得た。この標本は現在剖出作業中である。

---

\*アイヌ語で「パンケー」とは「下のー」という意味で、「ペンケー(上のー)」と対になって使用され、単独で使用されることはない。従って、富内市街を流れるトサノ沢と対であったものが聞き間違いで現在にきていると思われる。しかし、「パンケ(ペンケ)トサノ沢」と「パンケ(ペンケ)ルサノ沢」のどちらが正しいのか不明なので、ここでは従来通りの地名を使用する。

第3表 穂別町立博物館所蔵 モササウルス化石一覧表

1990年3月3日現在

凡例は第1表に同じ

登録番号	受入番号	発見者	発見年月日	産地	産出層準	産出部位	文献
HMC-10		中条 太光	1980-09-02	字稲里、白船の沢	函淵層群	尾椎骨、指骨、足根骨	鈴木(1984), 鈴木ほか(1982)
HMC-11	82-196, 201	森谷 彰 佐々木秀吉	1982-10-31	字稲里、穂別川	蝦夷上部	頭骨、頸椎、角骨、歯、環椎、骨片	地徳(1987), 鈴木(1984)
HMC-12	82-199	鈴木 茂	1982-11-20	字富内、パンケルサノ沢	函淵層群	前肢骨、椎骨、肋骨	地徳(1987), 鈴木(1984, 1985, a, b)
HMC-370	84-82	福居 正高	不明	門別町、チベシナイ	蝦夷上部?	椎骨、歯	地徳(1987)
HMC-371	85-53	金子 由三 地徳 力	1985-09-23	字長和、サヌシユベ川	蝦夷上部	歯、頭骨、椎骨	地徳(1987)

第4表 穂別町立博物館所蔵 魚類化石一覧表

1990年3月3日現在

凡例は第1表に同じ

登録番号	受入番号	発見者	発見年月日	産地	産出層準	産出分類群: 部位	文献
HMC-232		穂別町長 額竜 発掘調査団	1975-06-	字長和、サヌシユベ川	蝦夷上部	軟骨魚類: 歯	地徳(1987), 久家(1984)
HMC-372		菅原 昭二	1978-05-	未詳	未詳	軟骨魚類: 椎骨	
HMC-373	81-30	鈴木 茂	1981-09-20	字平丘、大曲の沢	函淵層群	軟骨魚類: 歯	
HMC-374	81-35	高橋 博志	1979-06-	字穂別、キウス	幌内層	軟骨魚類: 椎骨	
HMC-375	82-150	鈴木 茂	1982-07-12	字穂別、キウス	幌内層	硬骨魚類: 鱗片	地徳(1987)
HMC-230	82-200	鈴木 茂	1982-11-21	字富内、パンケルサノ沢	函淵層群	軟骨魚類: 歯	地徳(1987)
HMC-231	82-200	鈴木 茂	1982-11-21	字富内、パンケルサノ沢	函淵層群	軟骨魚類: 歯	地徳(1987)
HMC-376	85-50	永井 年光	1985-09-	平取町	未詳	軟骨魚類: 歯	地徳(1987)
HMC-377	85-67	佐藤 亮一	不明	字長和、穂別川	蝦夷上部?	硬骨魚類: 体幹	地徳(1987)
HMC-378	87-19	地徳 力	1987-09-12	字穂別、オビラルカ	滝ノ上層?	硬骨魚類: 体幹	
HMC-379		千代川謙一	1987-11-	小平町	蝦夷上部?	軟骨魚類: 歯	
HMC-380	89-8	三宅 俊一	1989-05-12	字長和、スタボマナイ沢	蝦夷中部?	軟骨魚類: 椎骨	

穂別町立博物館には少なくとも3つないしは4つの分類群に分けられるカメ化石が収蔵されていることが判りつつある。これらの標本群の中にはほぼ一体分の化石骨が含まれているものもあり、また化石骨自体の保存も極めてよい。平山・鈴木(1985)以来、詳細な報告がなされていないが、現在研究中であり、近い将来報告がなされる予定である。

#### IV モササウルス化石について (第3表)

穂別町立博物館が所蔵するモササウルス化石については鈴木(1984)が、3標本について報告し、また、一部については詳細な記載がなされている(鈴木; 1985a, b)。これ以後、新しくモササウルス化石と判明したものは地徳(1987)が、1標本について概略を報告し、1標本について発見の経緯、剖出作業の経過、モササウルス類と思われることなどを報告したが、これらについて以下に記す。

HMG-370 は、平取町在住の福居正高氏が門別町チベシナイ沢で発見し、1984年10月4日に穂別町立博物館に寄贈した。この標本は現在剖出中であり、概要ははっきりしていない。

1985年9月22日、上川郡上川町在住の金子由三氏が穂別町立博物館を訪問し、脊椎動物の骨格の一部と思われる化石を含有した石灰質団球の破片を寄贈した。金子氏の証言から、現場は1975年に荒木新太郎氏が長頸竜を発見した場所に近いらしいこと、また現場には、ほとんど粉々に破砕された石灰質団球が残存することが判明した。

翌日、筆者は数時間かけて、その現場を探しだし、数十個に破砕された残りの石灰質団球を回収した。回収された石灰質団球の破断面には、薄く複雑な骨格が見え、何物かの頭部であることが推測された。粉々に破砕された石灰質団球の復元には約2カ月を要したが、中央部は持ち去られていた。この化石はすでに剖出を完了し、モササウルス類の後頭部であることが判明しているが、詳細については後日報告する予定である。

穂別町立博物館が所蔵しているモササウルス類には少なくとも三つの分類群があることが判明しているが、断片的な標本が多く、より多くの検討が必要である。

#### V 魚類化石について (第4表)

穂別町立博物館には、12標本の魚類化石が登録されている。これらのうち、6標本について地徳(1987)が概略を報告したが、いずれも断片的な標本であり、一覧表を示して記述を省略する。

#### VI 哺乳類化石について (第5表)

穂別町立博物館には8標本の哺乳動物化石が所蔵されている。これらの標本はデスマスチルスかあるいはクジラ類である。多くは断片的な標本であるが、これらのうちHMG-343のデスマスチルスについて赤松(1984)、木村・赤松(1984)、松井ほか(1984)が詳述している。この標本以外の7標本について略述する。

HMG-381 は穂別町に在住する菅原昭二氏が穂別町字穂別スミガマの沢で1979年4月18日に発見した。クジラ類の椎骨であることが判明している。

第5表 穂別町立博物館所蔵 哺乳類化石一覧表

凡例は第1表と同じ

1990年3月3日現在

登録番号	受入番号	発見者	発見年月日	産地	産出層準	産出分類群：部位	文献
HMG-381		菅原 昭二	1979-04-18	字穂別 スミガマの沢	滝ノ上層	クジラ：椎骨	
HMG-343	86-48	河野 哲	1978-04-15	字安住 オノテラの沢	滝ノ上層	デスモスチルス：下顎骨、臼歯 椎骨、肋骨、胸骨	赤松(1984)、木村・赤松(1984)、 松井・山口・木村(1984)
HMG-382	81-3,4	大塚 義隆 穂別町教委	1981-06-03	字和泉 カイクマ沢	軽舞層	クジラ：椎骨ほか	地徳(1987)
HMG-383		中村 敏子	1981-10-	字穂別、茂別 穂別川	未詳	クジラ：上腕骨	
HMG-384	82-110	鈴木 茂 高木 俊男	1982-06-03	門別町	厚賀層	クジラ：下顎骨	地徳(1987)
HMG-385	86-79	藤田 欣亨	1986-10-05	字穂別 オビラルカの沢	滝ノ上層	デスモスチルス：椎骨、大腿骨	地徳(1987)
HMG-386	87-19	地徳 力	1987-09-12	字穂別 オビラルカの沢	滝ノ上層？	クジラ：頭骨	
HMG-387	87-19	地徳 力	1987-09-12	字穂別 オビラルカの沢	滝ノ上層？	クジラ：椎骨	



HMG-382 は苫小牧市在住の大塚義隆氏の情報により、穂別町字和泉のカイクマ沢から穂別町教育委員会が1981年に採集した。大型のクジラ類であることが判明しているが、極めて保存が悪く、詳細は不明である。

HMG-383 は穂別町に在住する中村敏子氏が1981年10月に、穂別町字穂別の茂別付近で採集した。クジラ類の上腕骨であることが判明している。

HMG-384 は当館の鈴木茂学芸員（当時）と高木俊男氏（北海道大学：当時）が門別町賀張付近で地質調査中に発見した。クジラ類の下顎骨であることが判明している。

1986年10月5日、穂別町で二体目のデスモスチルス化石（HMG-358）が発見された。穂別町教育委員会の藤田欣亨氏が穂別町字穂別オビラルカの沢の支流で地質調査中に発見したものである。この標本については後述のHMG-386 とともに木村方一氏（北海道教育大学）に研究を依頼してある。

翌年9月12日、藤田氏が化石を発見した地域を追跡調査していた筆者がおなじ沢でいくつかの脊椎動物化石を発見した。これらの中には、小型クジラの頭骨（HMG-386）、別なクジラ類の椎骨（HMG-387）含まれている。

穂別町での化石の発見は白亜系からのものが大部分を占めている。これは白亜紀のアンモナイトがマニアの採集の対象となっているのが原因であると考えられる。しかし、上述したように穂別町に分布する新生界からも多くの哺乳類化石が産出している。大部分は断片的なものであるが一部には充分研究の対象となるものが産出しているため、今後は新生代の化石についても注意を払って行かなくてはならないであろう。

## Ⅶ その他の脊椎動物化石について

穂別町立博物館には、上述してきた以外にも多くの脊椎動物化石の資料が収蔵されているが、母岩からの剖出作業が進んでいないものや、高次の分類群も判明しない断片的な資料も多くある（1990年3月3日現在；12資料）。これらについては、概要が判明し次第、逐次報告して行く予定である。

## Ⅷ おわりに

穂別町立博物館には長頸竜化石が14資料、カメ化石が17資料、モササウルス化石が5資料、魚類化石が12資料、哺乳類化石が8資料収蔵されていることを報告した。また、これら以外にも研究中の多くの資料が収蔵されていることも報告した。これら個々の化石に対する評価は今後のこととして、このように多くの脊椎動物化石が穂別町立博物館に収蔵されるようになったのは、ひとえに一般化石愛好家が穂別町立博物館の活動に対して理解を示しているからに、ほかならない。他地域で発見されたと噂される化石が私物化されたり、研究されないまま死蔵されたり、新聞などで発表された後はどうなってしまったのか判らないものも数多くあると聞く。研究に時間がかかるのは事実であるが、研究を行ない判明した事実は速やかに報告して行くのは研究者の務めではなからうか。

本文中で紹介した数多くの穂別町立博物館への協力者に感謝の意を表し、本報告を終わる。

## 文 献

- 赤松守雄(1984) 北海道 *Desmostylus* 産出地の古環境。デスモスチルスと古環境、地団研専報、[28]、63—68、図版 I。
- 地徳 力(1987) 穂別町立博物館所蔵の脊椎動物化石について。日本地質学会第94年学術大会、講演要旨、263。
- 平山 廉・鈴木 茂(1985) 北海道穂別町の函淵層群産白亜紀ウミガメ化石について。穂別町立博物館研究報告、[2]、17—30、図版 I—III。
- 木村方一・赤松守雄(1984) 北海道穂別町産デスモスチルスについて。穂別町立博物館研究報告、[1]、11—23、図版 I—VI。
- 仲谷英夫(1982) 長頸竜化石穂別標本の形態と意義。日本地質学会第89年学術大会、講演要旨、240。
- (1984) 穂別町産クビナガリュウ(長頸竜)の復元。穂別町立博物館研究報告、[1]、37—40、図版 I、II。
- (1985) 北海道穂別町産より産出した長頸竜化石(HMG-1)について。穂別町立博物館研究報告、[2]、43—49、図版 I。
- (1989 a) 穂別町より産出した長頸竜(HMG-1)(爬虫綱、広弓亜綱、鱗竜目、長頸竜亜目、プレシオサウルス上科、エラスモサウルス科)の『和名』について。穂別町立博物館研究報告、[5]、43—48。
- NAKAYA, H. (1989 b) Upper Cretaceous elasmosaurid (Reptilia, Plesiosauria) from Hobetsu, Hokkaido, Northern, Japan. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan*, N. S., [154], 96—116, 14figs.
- 仲谷英夫・穂別町首長竜化石発掘調査団(1981) 北海道穂別町より産出したPlesiosauroid化石。日本地質学会第88年学術大会、講演要旨、223。
- 日本地質学会(1952) 日本地質学会地層命名規約。地質雑、58。
- 松井 愈・山口昇一・木村方一(1984) 北海道およびサハリンから産出した*Desmostylus*の層準と産状。デスモスチルスと古環境、地団研専報、[28]、51—61。
- MATSUMOTO, T., OBATA, I., OKAZAKI, Y. and KANIE, Y. (1982) An interesting occurrence of a fossil reptile in the Cretaceous of the Obira area, Hokkaido. *Proc. Acad., Japan*, 58, ser. B, [5], 109—113.
- 小島郁生・蟹江康光(1965) 北海道留萌郡小平村の白亜系産化石。自然科学と博物館、32、50—53。
- 小島郁生・長谷川善和・大塚祐之(1972) 北海道の白亜系産爬虫類化石。国立科博専報、5、213—220。
- OKADA, H. (1983) Collision orogenesis and sedimentation in Hokkaido, Japan. In HASHIMOTO, M. and UYEDA, S. eds., *Accretion Tectonics in the circum-Pacific Regions*, 91—105, TERRAPUB, Tokyo.
- 鈴木 茂(1984) 北海道穂別町産白亜紀爬虫類化石について。穂別町立博物館研究報告、[1]、47—52。

鈴木 茂(1985 a) 中央北海道南部の上部白亜系産モササウルス化石について。

穂別町立博物館研究報告、[ 2 ]、31—42、図版 I—IV。

鈴木 茂(1985 b) 北海道穂別町の上部白亜系函淵層群産海棲トカゲMosasaurusの一新

種。海生脊椎動物の進化と適応、地団研専報、[30]、45—66、図版 I—X。

鈴木 茂・久家直之・仲谷英夫・平山 廉(1982) 北海道穂別周辺の上部白亜系より産出した脊椎動物化石。日本地質学会第89年学術大会、講演要旨、244。